2018年度ユニーク卒論

総合政策　学部

担当教員名	津田　睦美
論文執筆者名	築家　佑介
論文の題（テーマ）	学生はリクルートスーツを着る必要があるのか？ ～紳士服メーカー、採用企業、学生が持つ印象の相違～
簡単な内容（概要）	経団連による就職活動解禁日の前倒しが毎年のように行われ、企業と学生双方が困惑してきた。実際に就職活動を経験した筆者は、就職活動をとおして「おかしな」部分を感じてきた。それでも、どうしても就職したい」という思いから、自分の「本音」を隠し、企業にあわせて、就職活動をしてきた。同じスーツを着て、同じ鞄を持ち、同じ姿勢で企業の説明を聞く。そんな異様な光景が日本の就職活動の慣例となっている状況を、学生、企業、大学のキャリアセンター、スーツメーカーに問いながら、現状を分析し、将来に向けたより良い就職活動の仕方を考察する。
推薦の理由	2018年の秋学期が始まった頃、パンテーン（P&G）が、就職活動をする学生たちの統一された髪型に疑問を投げかける意見広告を行った。新聞各紙、東京では渋谷駅、メトロの中吊りに大々的に放たれた広告には、ツイッターで集められた就活生の本音も添えられていた。これには、学生、社会人はじめ、大きな反響があった。 希望する広告関係の会社に内定が決まっていた築家さんは、この広告の出る前から、暗黙の了解となっている就活のスタイル、特にリクルートスーツのあり方を検証する卒業論文に取りくんでいた。彼の卒業論文のテーマは、『学生はリクルートスーツを着る必要があるのか？～紳士服メーカー、採用企業、学生が持つ印象の相違～』であり、先行研究も、統計資料も特に存在しないものだ。彼は「就活」に関わる疑問を、学生、大学のキャリアセンター、スーツメーカーなどに直接問いかけ、自分で集めた回答を分析した。 本論文は、学生の目線で、終わったばかりの就職活動を問い直すユニークなものである。指導教員としては、彼の論文には、世間の風潮に準じる自分自身への内省や、一時的な期間にある「就活」を社会に出るまでの通過点として冷静に見る視点があり興味深いものだと評価する。また、パンテーンの広告が出る時期と重なったことからもわかるように、タイムリーな時勢を読む力があると考えている。